朝日新聞　2024年（令和6年）11月27日（水）

ひと

2024・11・27

詩人・宮沢賢治は、何度も作品を書き直す「推敲（すいこう）の作家」。詩集「春と修羅」や童話集「注文の多い料理店」の刊行から100年になる今年、草稿の移り変わりの魅力の研究で宮沢賢治賞を受賞した。

水戸市出身。東京教育大（現・筑波大）で日本文学を学んでいた時、賢治の校本全集が出た。後半に推敲の過程を示す文章が掲載され、作品の面白さだけでなく、その推敲の過程に魅せられた。

賢治の推敲の魅力を研究し、第34回宮沢賢治賞を受けた

杉浦（すぎうら）　静（しずか）さん(72)

「最初はファンタジーだった童話が、次第に探偵物語風になり、最後には少年たちが産業組合を作るといった社会的なものに変わっていく。当時の賢治の心境の変化が読み取れる、と思いました」

大妻女子大（東京都）の教員になった後も、岩手県の宮沢賢治記念館に通い、草稿のマイクロフィルムを見続けた。「賢治作品の全草稿に目を通した研究者」として知られ、2009年に完結した「新校本宮沢賢治全集」で編纂（へんさん）委員を務めた。

賢治の草稿は、余白がびっしりと書き直しの文字で埋まっているのが特徴だ。

「『銀河鉄道の夜』は四つの草稿が存在しますが、いずれも同じ原稿用紙の上で書き直されています。一つの原稿用紙にいくつもの層が形成され、物語が積み重なるようにして存在しているのです」

喜びや寂しさ、孤独といった感情が、推敲で削られ、また加えられていく。

「心の紆余（うよ）曲折が『賢治とはどんな人物だったか』を語りかけてくれる」

文・写真　三浦英之